

以上のことから分かるように、公園における行動状況は周辺環境の影響を受け、地域間に差異が生じているのである。

## 来るべき国際化の波へ

### —日本競馬の門戸開放—

#### 大西ゆみ

近年、競馬がレジャーとして大きく取り上げられるようになってきた。週末には、競馬場で若いカップルや、小さな子供連れの親子をしばしば目にする。競馬場がアミューズメント施設として、広く受け入れられているのである。

しかし、競馬場で繰り広げられる華やかなレースの一方で、それを支える軽種馬生産界が、現在最大の危機に直面しているのであった。というのも、日本で生まれ育った競走馬(内国産馬)の売上げが、近年急激に減少しているのだ。その理由は、外国産馬が日本へ大量に輸入されているからなのだ。なぜ、このように外国産馬の輸入量が増加したのか。それは、日本中央競馬界(JRA)による「外国産馬出走制限緩和8ヶ年計画」の実施、および、外国産馬の価格の安さ、日本の競走馬流通の停滞などのさまざまな要因があげられる。

まず、「外国産馬出走制限緩和8ヶ年計画」の実施にあたっては、JRA、日本軽種馬協会および、日高軽種馬農協との激しい論争が繰り広げられた。外国産馬の出走枠を広げれば、今より一層多くの外国産馬が日本へ輸入されることになる。そうすれば内国産馬は売れなくなり、しかも競走馬が優勝した時の「生産者賞」などの賞金が海外の牧場に支払われることになり、日本の中小の生産牧場は経営が成り立たなくなる。こういった牧場側の立場を考慮してJRAでは、保護策をとっているがあまり効果はみられない。

次に競走馬の価格については、日本の種牡馬の種付け料の高さがその要因である。競走馬流通の停滞は、昔から続いている庭先取引

が最大の原因をつくっている。古い調教師と馬主、生産者の関係が、若い(新しい)馬主の購買意欲を減少させてしまっていると言ってもよい。つまり、日本国内では、良い馬を安く手に入れることが非常に困難になっているのだ。

外国産馬と内国産馬の能力については、収益性においてはそれほど差はない。しかし、3歳、4歳における外国産馬の優位性だけは目をみはるものがある。なぜ、3歳、4歳においてこれほどの格差が生まれるかというところ、それまでの飼養調教技術の差に因るところが大きい。日本人生産者には技術の向上が必要である。

日本の競馬がこれほど見直されるようになったのは、世界最高レベルの賞金体系をもって競馬が開催されているので、海外の競馬関係者から注目されるようになったからである。日本は、海外から押し寄せてくる波に立ち向かうためにも、国内における軽種馬生産を、もっと合理的に、ただ生産頭数を増やすのではなく「少数精鋭制」で、行っていかなければならないだろう。

## 商店街の現状と将来

### —板橋区大山ハッピーロードを例として—

#### 大堀仁美

本論文は、近年の商店街事業の低迷、存続の危機がいわれている中で、わたし自身が日常生活において利用しているハッピーロード大山商店街について、商店主がイメージするハッピーロードと、消費者がハッピーロードについて感じていることとの差を考え、商店街の実態を知り、商店主の意識確認をもとに、対策を考えることを目的とした。

方法としては、事業調査報告書、参考文献等資料参考後、板橋区役所商工課とハッピーロード大山商店街振興組合を訪問し、商店街の現状を知り、傾向と対策について考えた上で、ハッピーロード利用者で同年代の若い女性に聞き取り調査を行い、商店主に行ったア